

## 展示国宝一覧

### ○ 大図（石川県南部：加賀市・小松市・白山市・金沢市）

#### 「自江戸歴尾州赴北国到奥州沿海図 第十三〈自橋立／至宮越〉」

国宝：地図・絵図類 番号27 縮尺1/36,000

この大図は享和3年6月27日に橋立村を出立して、7月3日に金沢城下を出立するまでの測量成果である。安宅浦から加賀藩領に入ったが案内の村役人に村高や家数等を質問しても、「領主より指図なし」として答えようとしないう加賀測量が始まった。さて、国宝の大図は一見すると単調極まりない。日本海に沿って緩やかに弧を描く測線と「安宅」などの村名が続くだけである。ただ、日本海沿いの海岸砂丘列の絵画的表現はさすがである。

ところが、7月2日の宮越町から金沢城下までの測線は不自然なまでに直線である。さらに、この区間の村落の名前が一切記されておらず、これまた不自然である。また測量日記にはこの区間で「測量に量程車を用」とある。これらの謎については、河崎倫代会員の「伊能忠敬、金沢測量三日間の謎」（会報第68号）が解き明かしている。

なお、会報第84号によると、金沢城下で宿泊地（住吉屋太兵衛）跡に石川県支部の手によって案内板パネルを設置したとのことである。



### ○ 大図（石川県東部・富山県西部）

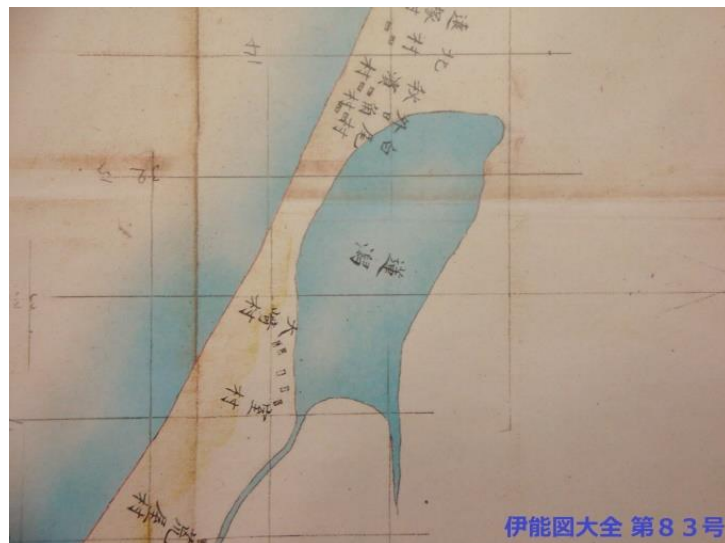
#### 「自江戸歴尾州赴北国到奥州沿海図 第十四之一〈自宮越／至東岩瀬／及氷見／又至分道今浜〉」

国宝：地図・絵図類 番号28 縮尺1/36,000

大図では蓮瀉（現在の河北瀉）が描かれ、内灘の砂丘で日本海から切り離された様子がよくわかる。測量隊を迎えた側の貴重な史料が会報第83号に掲載されている。河崎倫代会員が「加賀藩十村役の手代たちが見た伊能隊」で紹介した「新田家文書」の口語訳には、次のように生々しい情景が記されている。

「この村の山陰に湖水があるらしいが、何瀉といふのか」と、手代どもへお尋ねになったので、「蓮瀉です」と申し上げました。「ここより道程はどれ程あるか」とお尋ねになったので、「前々より測ったこともないので、存じません」と手代どもが答えたところ、ご自分より「およそ二丁もあるか」とお聞きになったので、「それくらいでしょうか」と聞き流しておきました。

なお、展示の国宝の大図では蓮瀉の東側は大和絵風のすやり雲でぼかしてある。



## ○ 大図（能登半島中央部・能登島）

「自江戸歴尾州赴北国到奥州沿海図 第十四之二

〈自今浜／至黒島 又自宇出津／至氷見〉」

国宝：地図・絵図類 番号29 縮尺1/36,000

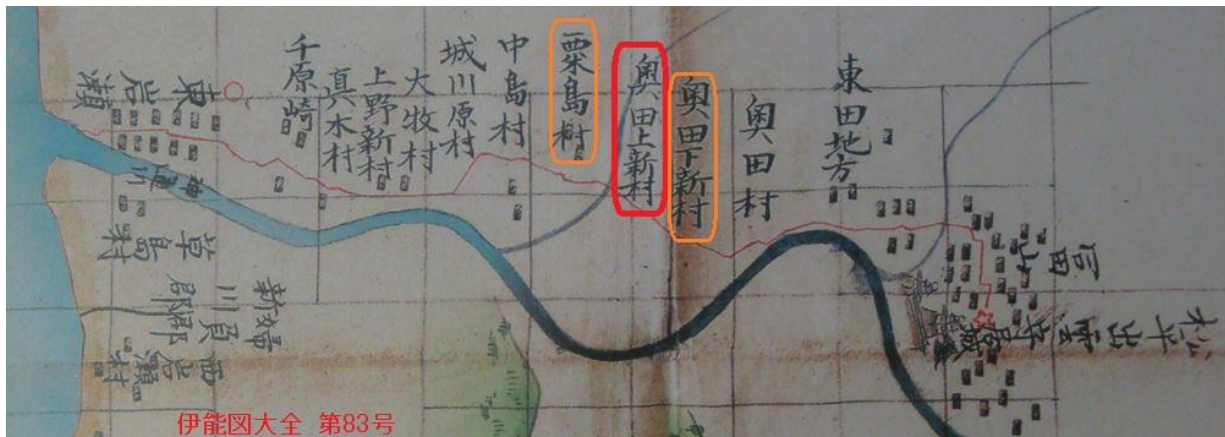
7月5日から能登半島の東側を伊能忠敬本隊が、西側を平山郡蔵の支隊が分担する大手分が始まった。展示されている大図を見ていくと、朱筆で訂正した個所がある。平山支隊が担当した能登半島西岸の「大忍寺村」と「大忍寺新村」の「忍」に朱線が引かれ、脇に「恩」と朱書されている。アメリカ議会図書館の大図、東京国立博物館蔵の中図（武揚堂版）、国土地理院の中図で確認すると「大恩寺」となっており、伊能家控図の訂正が引き継がれている。ところが徳島大学の中図（沿海地図 上）は「大忍寺」のままである。官板実測日本地図も「大忍寺」と訂正前の地名情報を引き継いでいる。

測量日記の原文を見ると、平山支隊の7月6日の記事は「忍」か「恩」か微妙である。しかし7日は明らかに「恩」である。翻刻を見ると、e史料館版は両方とも「忍」と翻刻している。佐久間達夫氏の大空社版では両方とも「大念寺」と翻刻している。「忍」か「恩」か、はたまた「念」か。

歴史的事実としては「大念寺村」が正しいようである。明治政府が各府県に命じて編纂した江戸時代の末期における全国村名目録である「旧高旧領取調帳」には「能登国・羽咋郡・大念寺村・旧高391石」とあり、大正6年に刊行された「石川県羽咋郡誌」にも大念寺村と新村の江戸時代からの歴史が記されている。現在でも石川県志賀町には「大念寺」というバス停などがある。

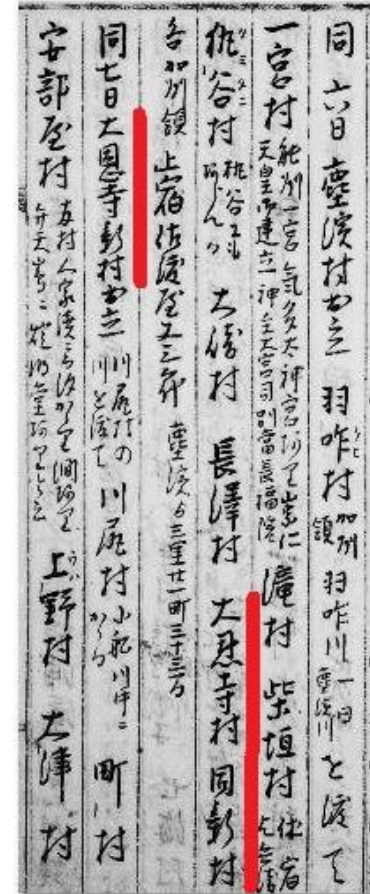
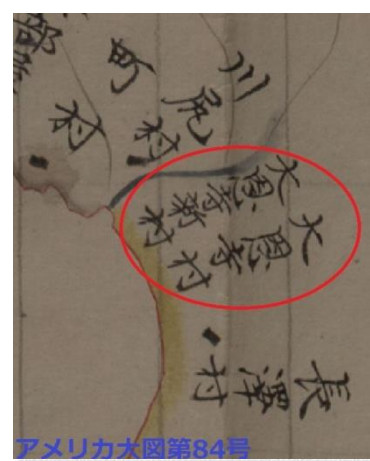
測量日記は村役人たちから聞取った地名を記載するためか誤記がある。そのため先触れには、国郡村名・領主姓名・村高・家数などを書上げて差出すようにと指示している。しかし、加賀藩領に入ってからからは、先触れからその指示が除かれている。測量日記では「大念寺」を「大忍寺」と「大恩寺」と誤記し、依拠すべき村明細書上が無いために、文化元年上呈伊能図には「大忍寺」と記して、後日「大恩寺」と変更したのであろう。しかし、「大恩寺」とした理由や根拠がわからない。また、その後の伊能グループによる副本作製のなかで、大図・中図・小図の下図はそれぞれどの段階で訂正された、あるいは訂正されなかったのだろうか。結果として「大念寺」の伊能図上の表記は「大忍寺」と「大恩寺」の2系統が混在することになった。伊能忠敬記念館の文化元年中図、文化4年中図などや国文学研究資料館の中図は、「大忍寺」と「大恩寺」のどちらの地名情報を引き継いだのであろうか。この小さな痕跡を追いかけてみたくなった。

改めて他の大図を見てみると、大図（石川県東部・富山県西部）にも朱書きの個所がある。粟島村と奥田下新村の間に「奥田上新村」が朱書きで加筆されている。



測量日記の8月4日には「奥田上新村（富山領）」と明記されている。

アメリカ議会図書館の大図、東京国立博物館蔵の中図（武揚堂版）、国土地理院の中図で確認すると「奥田上新村」が記載されており、伊能家控図の追加情報が引き継がれている。一方、徳島大学の中図には「奥田上新村」が記載されていない。二つの伊能家控図に追加された情報が徳島大学中図の作製には反映されていない。徳島大学中図はどのような下図から作製したのであろうか。



○ 大図（能登半島北部）「自江戸歴尾州赴北国到奥州沿海図 第十四之二〈自黒島／歴狼畑／至宇出津〉」

国宝：地図・絵図類 番号30 縮尺1/36,000

右図は平山郡蔵支隊が測量した輪島周辺である。測量日記の享和3年7月13日には「海岸不通行に付、山道を通る」と有るように測線が海岸を離れている。輪島については「繁昌なる所にて、家数も千軒余もあり、膳椀其外器物も出来、索麵よし」と記載されている。

なお、能登半島中央部・能登島の大図と能登半島北部の大図を接合する部分には、コンパスローズだけでなく、切れ込みが入っているのも特色である。

今回展示されている4舗の大図の範囲については、石川県支部による「加賀藩測量の足跡をたどる」（会報第73、74、76、78、79号）という詳細な踏査記録がある。石川県支部はすごい。



○ 大図（佐渡）

「佐渡国沿海全図」 文化元(1804)年作成

縮尺 36,000 分の 1

国宝：地図・絵図類 番号89

享和3年8月19日から25日まで、出雲崎で「渡海風なし。逗留。」を続けた後、8月26日に小木湊に上陸してから平山郡蔵と手分けして佐渡測量を終え、9月17日に寺泊に帰着するまでの成果の大図である。なお、「佐渡国沿海全図」は伊能忠敬記念館HPの「資料画像提供」で公開されており、概要をつかむことができる。



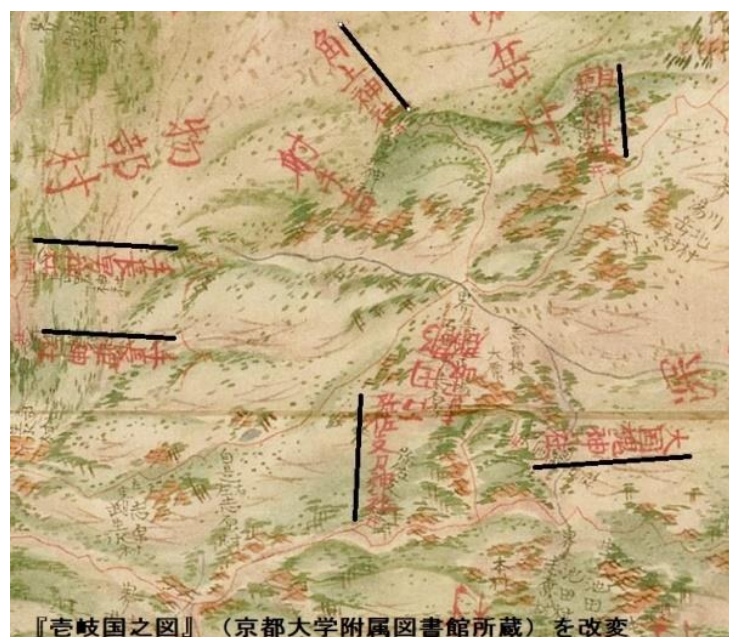
○ 下図（長崎県壱岐島）

「壱岐国下図」 縮尺 36,000 分の 1

国宝：地図・絵図類 番号360

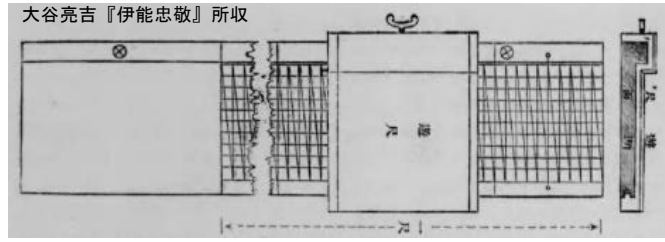
82.9×94.3cmという広域下図である。壱岐島測量は文化10年3月13日から24日までである。この下図を見ていると、これまでに無く沢山の神社が記載されており、街道などからわざわざ山頂等にまで測線を延ばしている。3月22日付で坂部貞兵衛が忠敬に送った書状が会報9号13ページに紹介されている。伊能本隊と坂部支隊の測量ルートを調整する中に「式内社が三座もあるから是非測るべき街道です」とある。五島列島や対馬測量でもこれほどに神社を記載してはいない。壱岐島測量における神社の扱いは謎である。

なお、インターネット上で公開している京都大学附属図書館所蔵資料の電子化画像は、2017年12月1日より、利用申請・利用料の支払手続きをすることなく、自由に利用できるようになった。「京都大学貴重資料デジタルアーカイブ」の「検索」で「伊能忠敬」を入力する。



○ 折衷尺 (大) 国宝：器具類 番号51

この折衷尺 (大) の裏面には「田中丹柳作」の刻銘があるとのことである。関東では享保尺、関西では又四郎尺が使われ長さに違いがあったので、忠敬は両者を折衷した折衷尺を使ったとされてきた。ところで、「近代日本の計量関係実物資料の成立過程の研究」(『計量史研究』第26号)には、平成14年12月に国立科学博物館において三次元座標測定機でこの伊能尺などを精密に測定した結果が報告されている。実測の結果として、享保尺、折衷尺、又四郎尺のどの系統とも異なり、記念館所蔵の2本の伊能尺は折衷尺ではないとしている。



○ 覚 (人足・馬触) 国宝：文書・記録類 番号288

文化8年11月25日に始まる第8次測量の際に出されたもので、測量器具を運ぶために、人足七人、馬一疋、長持二棹を用意するように指示している。

○ 書状 (秀蔵を勘当した) 国宝：書状類 番号136

文化12年4月30日の『江戸日記』に「秀蔵退身致す」という記事がある。庶子の秀蔵を勘当したことを佐原にいる娘の妙薫に伝えたのが5月4日付のこの書状である。『伊能忠敬書状』の翻刻は右の通りである。文化12年4月27日に第9次測量隊が伊豆七島測量に出発した。忠敬は高齢のため参加せず、身の世話をする次男の秀蔵が勝手に品川まで見送った。ところが禁を破って酒を飲み夜半に帰宅した。激怒した忠敬は秀蔵を追い出した。

『伊能忠敬書状 (千葉縣史料近世編文化史料一)』P67~68

一、昨三日桑原隆朝態と罷越し、「秀蔵事大心得違二而、不埒致し」一言も無之候、何卒桑原隆朝江「御差置被下候様」ことの願のよし、「桑原被申候は亀嶋先生方御頼も」有之候ハ、兎も角も可致旨被致返答、「三日ニ右御相談有之候間、秀蔵儀」毛頭御頼ハ不致候、御差置候ハ御堅慮「次第と申候得ハ、何様秀蔵儀弥以」我慢なる様子、乍両度酒を呑ミ「罷越し、多言にて一切ニ誤を改候」様子ハ相見江不申候、早と相断可申旨ニ「御座候、左候得ハ去廿七日弥以願酒ヲ」打破り、日の内ニ家内へ罷歸候儀ハ「致し兼、夜半ニ帰宅翌朝ニなり」ソシラ又振二而、誤を詫候事と察し候、実ニ言語道断の悪物ニ有之候、「無人不自由ながら右ノもの追払」申候ニ付、我等病氣も直り此上「寿命も延可申候、以上

五月四日 東河父

妙薫尼

すると桑原隆朝 (忠敬3番目の妻ノブの兄弟) がやってきて、秀蔵が桑原宅を訪れて不埒なことをしてしまって一言も無い、何卒桑原宅に置いて欲しいというのである。桑原は亀島先生 (亀島町に住む忠敬のこと) から頼まれれば何とかしましょうと返答

しておいたというのである。忠敬は秀蔵のことは毛頭頼むつもりは無いと断った。素知らぬ振りして桑原に詫びを入れて厄介になろうとする秀蔵は実に言語道断の悪者である。身の回りの世話をする者がいなくなり不自由であるが、秀蔵を追払ったので自分の病氣も治り、寿命も延びるだろうと書き送っている。第1次から第6次測量まで参加した伊能秀蔵は29才で勘当の身となった。

○ 「算法天生法指南」 国宝：典籍類 番号454~458 番号136

伊能忠敬の蔵書から会田算左衛門安明の和算書を展示している。会田は山形出身の和算家で、関孝和に始まる関流の和算を批判し、独自の最上流を立ち上げた。会田と忠敬の交流は深く、会田の次男の尾形啓次郎を内弟子としている。安藤由紀子氏の「和算の人脈」(会報49~54号)や前田幸子会員の「会田算左衛門安明」(会報68号)が詳しく紹介している。展示されているのは右のページである。

今有知圖三斜内容十圖只云全圓徑三十寸地圓徑寸人

術曰大中徑相乘開平方名子倍之加大中徑和乘全徑

答曰子全徑差算除之得小徑合間

今有知圖以大小中三圓及三線

全圓只云全圓徑寸八寸圓徑六寸中

圓徑五寸問小圓徑幾何

答曰小圓徑一十六寸

今有知圖以大小中三圓及三線

全圓只云全圓徑寸八寸圓徑六寸中

圓徑五寸問小圓徑幾何

答曰小圓徑一十六寸

今有知圖以大小中三圓及三線

全圓只云全圓徑寸八寸圓徑六寸中

圓徑五寸問小圓徑幾何

答曰小圓徑一十六寸